

陸軍少飛平和祈念の会、会報 No20 号

2020(令和 2)年 7 月

◎本会のHPは、<http://sho-hi.sakura.ne.jp/>

です。どうぞご覧ください。

◎毎月の第3土曜日の月例会ですが、8月はお休みで、次回は9月19日です。会場は、武蔵村山市市民活動センター、AM10～12時です。

◎経費節減のため、会報をメール配信に切り替えています。パソコンのメールアドレスを、heiwakinen@sho-hi.jp までお知らせください。

(1) 新規会員

(会員) 16期、後藤昭一さん、埼玉県入間市。15期乙、北村彦四郎さん、墨田区。16期、田中通義さん、千葉県野田市です。
よろしくお願いします。

(2) 会費、寄付の御礼

今年度の会費及び寄付金として、現金、為替振込、切手によって多額のご支援が送られてきました。今後のビデオ収録、文字起こし、証言集の刊行のため大切に使用させていただきます。本当にありがとうございました。

会費及び寄付を送っていただいた方々は以下のとおりです。感謝してご報告いたします(先着順)。

17期の吉田金司さん、青木勇さん、佐藤昭さん、金徳泰さん、柳橋晃一郎さん、瀬尾敏夫さん、吉田信輔さん、中央区の望月則子さん、15期乙の北村彦四郎さん、16期の田中通義さん、柏市の岸佳子さん、新潟市の桜井久雄さん、富樫健吉さん、加藤かよさん、20期の松原昭治さん、日野市の横溝清俊さん、15期甲の滝波登さん、武蔵村山市の石川伊三郎さん、新井幸子さん、19期の高林萬津樹さん、調布市の浅川明さん、17期の池田正義さん、18期の坂本幹雄さん、16期の後藤昭一さん、17期の大橋健一さん、大橋勝治さん、以上26名の方々から現金 86,000 円、切手 2,940 円、郵便為替 51,250 円、合計 140,190 円を送っていただきました。

ご支援大変ありがとうございます。今年度は助成金がないため貴重な活動資金となっています。ありがとうございました。

(3) 元少年飛行兵のビデオ収録

3月3日(火)18期坂本幹雄さんのビデオ収録を、新宿区産業会館で午後1時から4時過ぎまで約3時間実施しました。また3月15日、15期乙の北村彦四郎さんのビデオ収録を、午後1時から約3時間墨田区のご自宅で実施しました。4月14日、16期の田中通義さんのビデオ収録を千葉県のご自宅で約3時間半実施しました。

国の緊急事態宣言に従って自粛してきましたが、一部解除になりましたので再開することとし、7月28日市川市公民館で17期の瀬尾敏夫さん、8月6日偕行社で17期の吉田金司さん、8月29日町田市市民センターで15期甲の滝波登さんのビデオ収録を予定しています。

(4) 今後のビデオ収録と文字起こし、証言集続編の刊行について

引き続き、元少年飛行兵の皆さんのお話をビデオに収録し、文字起こしして「証言集」を刊行していきます。

これまでの収録者は、「証言第一集」の6名を含めて23名、今後収録をお願いしたい元少年飛行兵の皆さんはまだ5～6名程いらっしゃいます。合計で当初予定の30名程になる予定です。全員の文字起こしを行って「証言集」にまとめることとしています。

現在総計8名で14名分の文字起こしを実施中です。シルバー人材センターや学生ボランティアで出来ないか検討もしましたが、最終的に協力を申し出ていただいたNPO法人FJK(フォーラム自治研究)にお願いすることになりました。20万円で8月中に一次原稿を提出していただく契約です。武蔵村山市シルバー人材センターの見積もりは、文字起こしは1時間8千円プラス手数料でした。これは業界の水準よりかなり格安です。収録時間は一人平均3時間程ですので、20万円で文字起こし出来る人数はかなり限界があります。証言集の印刷費は500部で27万円、あと4冊作る必要があります。印刷代と文字起こしの経費だけで、一冊当たりの実費の製作費は900円でした。来年度以降、2年程度で、助成金を確保し、文字起こしと証言集続編の刊行を終えたいと考えています。

(5) 現在文字起こしを実施しているのは以下の方々です。

11期の金崎豊さん、鈴木善雄さん、西川陟さん、14期の瀬戸山定さん、15期乙の菊池乙夫さん、上野辰熊さん、北村彦四郎さん、16期の後藤昭一さん、田中通義さん、17期の佐藤昭さん、池田正義さん、杉本明さん、吉田信輔さん、18期の坂本幹雄さん、19期の成迫政則さん。引き続き残りの方々の文字起こしを実施してまいります。

(6) 桶川飛行学校平和祈念館が8月4日オープンします

熊谷陸軍飛行学校桶川分教場の跡地に桶川市が整備を進めていた「桶川飛行学校平和祈念館」が完成し、8月4日に一般公開が始まります。

少年飛行兵らが学び、大戦末期には特攻の訓練場に。桶川市が土地を買い取り、兵舎棟を復元して展示室を設けているようです。埼玉少飛会のメンバーも協力してきました。有志による視察を企画したいと思います。

(7) 2020（令和2）年度の会費納入のお願い

◎会費、切手の寄付等ご支援をよろしくお願いします。会費は切手で納めていただいても結構です。

◎以下の送り先をお願いします。

〒151-0071 東京都渋谷区本町6-7-7

陸軍少飛平和祈念の会 鳥海賢三

(8) 15期乙、北村彦四郎さんのビデオ収録報告

令和2年3月15日、墨田区のご自宅で15期乙の北村彦四郎さんのお話をビデオ収録しました。収録の一部を報告します。

北村彦四郎さんは、昭和2年生まれ、昭和18年10月、満15歳10か月で東京陸軍少年飛行兵学校に入学。学業期間を短縮させた第15期乙の少年飛行兵になりました。短期間に飛行兵を育成する方針で、特異な扱いを受けることになります。昭和18年10月は、本来なら第17期の少年飛行兵の入学時期でした。飛行兵の速成教育の方針の下で、15期乙の17歳2か月の少年特攻兵も生じました。

北村さんは、入学後すぐに東京から上級校の尾上陸軍航空通信学校に移動、基礎課程と一部上級の通信科目を学びました。6か月後の昭和19年3月31日には基礎校である陸軍少年飛行兵学校を卒業。第15期の少年飛行兵と同時に卒業したので15期乙と呼ばれました。直後の昭和19年4月、上等兵となり宮崎陸軍航空通信学校に行って教育隊所属となりました。3か月後、入学して9か月後の昭和19年6月、満16歳6か月の時に、「早く卒業させる」と言われ、実戦部隊への転属を覚悟していました。

同期生は、知覧基地や大刀洗基地、気象班は高円寺などに、次々と送られました。北村さんは第六航空軍の司令部の開設が遅れたため7か月遅れた昭和19年12月、入学してから1年2か月後、福岡の司令部の通信所に行き、新田原航

空教育隊の生徒の身分のまま実戦の任務に就きました。ちょうど満17歳になったばかりでした。

(昭和2年12月、栃木県生まれ、一人で志願を決めた)

北村彦四郎さん。昭和2年12月3日栃木県足利郡山前村に生まれる。旧姓は新藤さん。昭和14年に祖父が亡くなって以降、両親と男6人女3人の4男として育つ。家は農家。少年飛行兵に志願した頃は、長男と3男が中島飛行機に勤め、次男は浜松の航空隊にいた。中島飛行機は太田に大きな工場があった。三鷹でエンジン、機体は太田で製作していた。

昭和17年に山前尋常小学校を卒業、青年学校に入学し、教練などを受けていた。翌18年3月か4月に陸軍少年飛行兵に志願、6月に受験した。関心があったので役場の公告を見て、志願票を取り寄せた。役場を通さずに送った。村の受験生は20名と多くてびっくりした。宇都宮で試験があり、駅で待っていたら役場の兵事係が19名を連れて来た。

身体試験には10名が合格したが、学科試験を合格したのは1名(北村さん)だけだった。当時の兵事係は、村の召集令状を仕切るなど大変な係だった。後に兵事係についてのNHKの放送があって見た。国の召集割り当てを県の連隊がまとめたが、各村の兵事係が集まって調整していた。少年飛行兵は卒業すると旧制中学卒業資格がもらえた。尋常高等小学校の卒業と同じだった。尋常小学校の時は60人位いたが成績は5番には入っていた。上級の学校に行きたかった。それと飛行機に乗りたかった。



志願は親にも学校の先生にも相談せずに一人で決めた。他の人は兵事係など

に相談したようだ。飛行機に乗るなら陸軍の方が良いと思っていたので志願を決めた。受験した時には家族は知っていたと思う。その程度だった。真剣に相談した記憶はない。合格通知は9月20日の航空記念日にあった。青年学校で、皆でグライダーを引っ張っていた時に来た。親には反対されなかった。少年飛行兵を志願して親に反対された人はいなかったと思う。そういう雰囲気だった。長兄は中島飛行機に通っていたが相談しなかったし合格をお祝いされた記憶もない。そんなもんだった。フーンと言った程度だったと思う。陸軍には少年飛行兵とは別に通信学校とか戦車学校とかあったが皆生徒だった。死ぬようなことはなかった。少年飛行兵は飛行機が落っこっちゃうと死んじゃう。生徒では補償が出来ない。補償の関係で少年飛行兵になった。通信に分科された者も兵になった。通信学校や戦車学校は卒業しても4円のままだった。少年飛行兵は、半年過ぎて飛行兵になった途端に、上等兵として十何円もらった。

(東村山からロバの荷車で村山に)

入校の時、田舎では軍隊に入る時には必ず見送り人がついてくる。要するに途中で逃げないように。見送り人は近所の人。それで行ってきましたよと帰ってから報告する。校門に入ったのを確かめて。父母は来なかった。

村山と聞いて私鉄の東村山に行ってしまった。立川に行かなければならなかった。ロバで荷車を引いている人がいて、聞いたら「そこは遠いけど今から行くから乗って行くか」ということになった。ロバの引く荷車にひょっこり乗って村山まで行った。学校のすぐそばの家に飛び込みで泊めてもらった。謝礼をしたかどうか見送り人に聞かないと分からないが、そういう雰囲気だった。一泊して朝8時だから間に合わなかった。私鉄の東村山から立川まで遠かった。後になって西に行く時、学校から立川飛行場を突切るとすぐ立川駅だった。ロバの引く荷車でずいぶん長い時間がかかった。

「学校は、どうも東京ではないようだ、遠くに行ってしまうようだ」と見送りの人から聞いて10月3日に父母が来た。見送り人は父のいとこだった。近衛兵にいた人で東京に詳しかった。3日に父母と面会してその日の夜汽車で西に出発した。

入校してから3日間身体検査などの適性検査をみっちり受けた。尾上、加古川、八戸とか、地名で書いてあった。各学校の所在地だった。尾上なんて読めなくて、おがみ、おがみと言っていた。行先別の航空通信の学校とは知らなかった。尾上は加古川の隣りで高砂、今の高砂市。海岸縁で三式戦の飛行場があって毎日ぶんぶん飛んで賑やかだった。通信になったことは現地に行って、3日前に入っていた連中から「飛行機に乗れないようだ」と聞いた。飛行機に乗れないんだったらいやだと頑張る奴がいて、班長が一所懸命説得していた。帰っちゃ

った。帰っていいとなったんでしょうね。3日4日説得されたようだったが。

10月3日に両親に会って、その日の夜行列車で東京駅に出て、西へ西へと行った。名古屋で焼けたお城を見て、あー名古屋だと。それでもまだ西へ西へと行った。尾上がどこにあるのかも知らなかった。4日の夜一日かかって尾上に着いた。10月10日に宣誓式。生徒の代表が出て宣誓する。「入隊を命じられましたここに謹んで申告いたします」とやる。「かしらなか」の号令。将校さん達は抜刀礼かなんかやっていた。軍歴に載ったのは正式には10月10日。それまでは民間人扱いだった。宣誓の相手は、学校長でなく教育隊に配属されたので教育隊長。水戸に陸軍航空通信学校と本部があってそこに学校長がいた。教育隊は各地にあって教育隊長がいた。中佐とか大佐とかその辺。「滞空三千時間の経験によれば」なんて威張っていた人もいた。

(尾上陸軍航空通信学校から宮崎陸軍航空通信学校へ)

赤たんの生徒で四円の手当があった。二等兵はもっともらっていた。半年後には上等兵になって十七円もらった。半年間は落ち着いたしっかりしたカリキュラムで訓練された。1個中隊を3区隊に分けてやろうとしたらしいが、設備とか場所とかのやりくりがつかなくて、練兵場とか通信の構造とかあるので、3区隊を2区隊にしちゃった。それで将校が一人余った。航空通信出身の中尉もいたけどどこかに行っちゃった。区隊長が航空士官学校出だったものだから、まだ卒業したばかりだよ、その人が「気宇広大に持て」なんて言って、「備忘録、日記に『私は』なんて書くな、『余は』と書け」と言った。その人は面白くて、要するに士官学校でやっていた延長みたいなことをされたということでしょう。「胸を張って堂々と少年飛行兵らしく歩け」なんて。なんとなく肩をゆすって歩いていた。

カリキュラムはまずトントー（通信、モールス信号）が大変。受ける方も出す方も。物理は中学の先生が軍属になって来ていて、文官教官と言っていたが、数学と物理を教えられた。トントントーは、3月までにカタカナは全部覚えさせられた。15期乙は17期と同時入校だったが、あれは卒業時期で決まっていた。15期と一緒に卒業したから15期乙。最初の半年の基礎教育の中に上級の通信の教科が入っていた。

昭和19年3月31日に陸軍少年飛行兵学校を卒業して、その日に宮崎へ向かった。宮崎陸軍航空通信学校、新田原航空教育隊。宮崎県児湯郡富田村（かこぐんとんだむら）だった。今は新富町となっている。上等兵になり、一個内務班四十数名の大所帯になった。通常の兵舎の寝台は通路に一内務班二十四名だった。一区隊二内務班で四十八名、一中隊は三区隊で百四十四名、西洋で言う一グロスだね。あー一中隊は一グロスだったんだとわかった。

富田村では送受信とか通信所の開設、通信機の調整とかを訓練としてやった。通信するにはまず電波を出さなくてはいけない、その操作が出来なくてはいけない。それからトントンツーが出来なきゃいけない。それから暗号。だんだん切迫してきたら「お前らを早く卒業させる」ということになって、中隊の中から二個内務班が集められた。「早く卒業させるから夜も勉強する」といって夜の学科があった。早く卒業させるなんて訳が分からなかった。中隊の4分の1二個内務班、通称優秀班などと言われた。

6月頃に「早く卒業させる」と言われた。7月に富田村の野営に行って遊泳などをして帰ってくると隣の四中隊がいなくなっていた。諜報班だったが、新田原や木脇などの実戦部隊に転属されていた。10月頃かな、都城にもパラリパラリと学校に籍を置いたまま行っちゃった。知覧とか大刀洗にも行ってる。一個区隊ぐらいだから六十人位かな、気象班、東京の高円寺に気象台の学校があってそこに行った連中もいる。通信をやると思ったら気象観測などもやらされたみたい。飛行場には気象も必要だった。ビルマの飛行隊などに戦隊規模で展開するとなると、行くのに一か月もかかっていた。もっと有機的に行うため無線通信なども必要になっていたようだった。せいぜい半月程度にしたいという意図があったと戦後に知った。

(福岡西部司令部通信所)

12月に福岡西部司令部の通信所に転属になった。実戦部隊ではあったが、飛行場があるわけではなかった。各地の監視哨との通信を行っていて、八戸との通信を担当した。1時間おきぐらいに連絡したが電報などなかった。眠気覚ましみたいなものだった。八戸とは地3号無線機で通信した。地3号無線機は出力が30Wと小さく監視哨の諜報が持って歩けるものだった。地2号無線機は出力200W。一番大きい地1号無線機は出力1100Wで部屋に納まっていて、真空管も胸に抱えるほど大きかった。3階建ての鉄筋コンクリートのビルがあって、1,2階は吹き抜けになっていた。各地の監視哨の地図があって、監視哨のランプがパッパパッパと赤く点いた。列車の駅にある行き先の案内板と同じような、ガラガラと変わる標示板があった。足摺岬とか各地の岬や済州島などの監視哨の名前と敵の機種が何だとか機数が多いとかガラガラと標示された。

その監視哨からの通報を見る将校が一人付き切りになっていた。隣にNHKのアナウンサーがいた。「東部軍管区情報、空襲警報発令」なんてそこでやっていた。全部の監視哨の情報が標示され、少尉か中尉ぐらいの将校が空襲警報をアナウンサーに指示していた。3階には作戦室があって打合せが始まると、でかい地図があって、金モールの参謀がぞろぞろ集まって来ていた。その一角に通

信の部屋があった。24時間3交替、3組しかいなかったから休み無しだった。濟州島からの情報は良い情報だったと聞いている。空襲警報なんてしょっちゅうで、毎日だった。関門海峡を封鎖したくて、B29が一機か二機で機雷を落としに中国の奥地から来ていた。

昭和19年12月に福岡に行って、翌年の3月まではのんびりしていた。沖縄戦が始まったら途端だった（忙しくなった）。沖縄戦は3月末、4月に本島上陸が始まっていた。福岡は第六航空軍の司令部だった。第三航空軍が中国、第四航空軍が南方、第五が満洲だった。南方の航空部隊が壊滅状態になってしまっただけで第六航空軍をつくった。12月に福岡の第六航空軍の司令部に転属になったが準備は出来ていた。12月まで7か月も待たされた。後になって調べたら、第六航空軍の司令部の位置を決めかねていたらしい。いよいよフィリピンがだめになって第六航空軍の司令部は福岡ということになって福岡に行くことになった。一時は台湾という話があって、爪を切ったり髪の毛を詰めたりした。遺言を書いて中隊に出しておけと言われた。台湾に行ったらやられてしまうということだった。

西部軍の大將も福岡と一緒にいた。西部軍の司令部は福岡のお城の中。第六航空軍の司令部はお城のそば、今の高等裁判所になっている所の奥に三階建てのビルディングがあった。それが第六航空軍の司令部だった。陸軍は八時になると将校が馬でお城に入って行った。航空軍は車だった。金色の旗を立てて入って行った。片方は馬に乗った司令官を軍曹が走って付いて行った。陸軍は馬でなければいけなかったんでしょね。こっちは将官旗を立てて車。ちょっと入口が違っていただけだった。

作戦室はドアだけだった。沖縄の地図が広げられて作戦の陣地を示すものが上に置かれていた。参謀だけが作戦室にいて将校は電話当番だった。そんな様子を見ることが出来た。宿舎は旧制福岡高校の生徒会館。コーヒーがでたり、多少のご飯ぐらいは食べられた所だったと思う。そこを借りてたたきに藁布団を敷き詰めて、毛布も掛けっぱなしで、もう軍隊（の規律？）なんてなくなっちゃっていた。食事は軍隊だから同期生が仕入れに行ったりして炊事当番をやった。

福岡では、少年飛行兵の組織のまま、内務班や班長もそのまま上等兵として通信の仕事についていた。体制は学校時代のまま、所属は教育隊のままで、実質的に本番をやっていた。掃除や飯上げの二等兵や一等兵も3、4人いた。十九通連、第十九航空通信連隊というのがあった。それが5月か6月に福岡の片江に連帯本部をつくって送信所をつくり、十いくつかの各地と通信していた。二十以上は皆南方だった。昭和20年1月29日が航空通信学校の卒業日だった。以降は第十九航空通信連隊の所属になったが、実態は航空通信学校の体制で第六航空軍の仕事を続けた。（以下略、途中まで）